

個人発表

浅井雅 (神戸大学大学院生)

「幕府・諸藩における儒者登用の動向 ——17・18 世紀を中心として——」

【要旨】

先行研究においては、諸藩に迎えられた賓師や儒学的教養を持った藩士と、狭い意味での藩儒（儒職をつとめることを職掌として藩に召し抱えられた学者）とが、混同されてきた。しかし、狭い意味での藩儒が幅広く成立してくるのは、18 世紀のことである。彼らは、学問・教育などを職掌とする武家社会の特殊技能者であり、近世武家社会における思想・知の社会的あり方、文化の構造を具体的に明らかにする上での重要な手がかりである。これは、幕府の儒者についても同様である。

しかしながら、幕府・諸藩の儒者について、先行研究では、各思想家の思想のテキスト分析を中心とした伝記的研究は数多いが、幕府や各藩においていつ頃どの程度の待遇で何人の儒者が召し抱えられていたのかといった、儒者の登用について全体を俯瞰する研究は管見の限り見当たらない。

そこで本研究では、幕府や諸藩が儒者を召し抱えるという傾向が顕著になる元禄・享保期から、諸藩において藩校を設立して儒学により藩家臣団教化を行うという政策が広く採られるようになる宝暦・天明期を経て、幕府において異学の禁止と昌平坂学問所の直轄学校化が政策化される寛政期に至る 17・18 世紀を中心として、幕府・諸藩において、いつ頃どの程度の待遇で何人の儒者が召し抱えられたのかを具体的に明らかにしたい。

本研究の第 1 節では、龍野藩における儒者登用の動向、また、一定の水準以上の特殊技能(学力)を持った藩儒を確保するためにどのようなシステムが設けられていたのかといったことを『諸氏略系』全 7 巻・『脇坂家無足諸士略系』全 10 巻（たつの市立龍野歴史文化資料館蔵）によって明らかにする。この作業を通して、龍野藩における〈藩儒の家〉の形成過程とその継承システムを明らかにする。

つづく第 2 節以下では、龍野藩で行ったのと同じ作業を教学政策が注目される諸藩及び幕府においても実施し、近世日本における儒者登用の動向を広く明らかにする。

池田智文 (ノートルダム女学院中学高等学校)

「辻仏教史学における「宗教」認識」

【要旨】

報告者は、昨年度の大会において、辻善之助の仏教史学に関する研究史をふまえ、日本近代史学史の中での辻仏教史学に位置づけについて次のような考察を行った。

総じて、近代「国史学」は、実証主義史学という学問方法論と、アカデミズム史学とし

でのナショナリズムによって、国家イデオロギーとしての「皇国史観」的歴史認識を「国史」の学知から補完・正当化する役割を担ったと言えようが、それは辻においても同様であった。辻は、「日本文化史」の中に仏教を位置づけていくが、実証主義自体が持つ歴史内在的方法論（史実の確定・網羅、帰納論による考証、歴史における固有性を問題とする方法論、無思想性〔アカデミズムとしてのナショナリズム〕）は、〈古代以来、天皇権威（及びその宗教的基盤である神道（神祇信仰））・国家権力と一体化してきた日本の仏教の歴史〉という研究対象それ自体に内在する問題と、近代日本における「文化史」研究・認識が「日本文化」・「国民性」などを称揚する「国体」論へと帰着せざるをえなかった時代・思想状況により、結果的にその日本仏教史像を「神仏習合」＝「国体」の枠組みへと導くこととなり、その仏教史像は―辻自身が意識すると否とに関わらず―国家神道体制という宗教性に立脚した近代天皇制の最もファナティックな思想状況を「宗教」史の次元から補完する役割を担うこととなった。

右の報告は、あくまで辻仏教史学の史学史的な位置づけを考察したものであり、報告に対する批判の中で、辻の「宗教」認識（「仏教」理解・「神道」理解も含む）を検討する必要性が指摘されるなど、辻仏教史学それ自体を思想史研究の対象として問題にしたものではなかった。それゆえ、本報告では、辻の「宗教」認識について、日本歴史における宗教の実践性に対する理解のあり方などを踏まえて考察したい。

石原和（立命館大学大学院生）

「如来教と文政大地震——宗教の地震語りと世界観——」

【要旨】

名古屋で開教した民衆宗教・如来教は文政2年6月18日、8月5日、9月4日に地震をテーマとした説教を設けている。この地震は同年6月12日に、伊勢、美濃、近江を中心に広範囲で発生したもので、多くの如来教の信者たちが住んでいた名古屋も大きな被害を被った。

この説教は、信者たちから教祖・喜之に向けられた、なおも余震が続く地震への恐怖、さらに地震で亡くなった未成仏霊への恐怖に対して、この世に生きる者たちが如来の機嫌を損ねてしまったために、地震が起きたのだと教祖が説明し、信者たちに「腹の中の得治」を改めるようにと、大きな危機感をもって提言する、という内容になっている。

本報告は、このような宗教の地震語りの事例をもとにして、説教で語られる世界と現実の世界の関連について、またそれが信者の信仰にどのように関わるのかについて近世宗教思想、近世民衆思想という枠の中で検討するものである。如来教の地震に関する説教の意味を1800年前後の宗教思想・民衆思想の中から検討するため、仏教での地震の捉え方の検討と同時に論を進める。具体的には、『阿含経』の中に見られる地震の捉え方の検討、如来教に大きな影響を与えた日蓮宗が重要視していた『法華経』の「如来神力品」における地震の捉え方の検討、如来教の説教とほぼ同時期に行われた近世後期の説教節『肥前温泉災

記』における地震（噴火、津波）と人間の関係の検討の三つを行う。この三つの事例を踏まえた上で、如来教が地震について語ったことの時代的意味を明らかにする。

以上の考察から、これまで近代との関わりが強調されてきた民衆宗教を、開教当時の宗教社会が共有する思想や課題の中から論じていきたい。この試みを通して、近世戒律運動の宗派的拡大、大乘非仏説・須弥山論争の登場、異安心事件の頻発、開帳の流行といった従来の宗教的秩序を乱す動きが起こり、また多様な利益を持ったはやり神が隆盛を極め、独自の世界観を持つ民衆宗教が開教する1800年前後の宗教社会を立体的に描いていきたい。

井関大介（東洋大学非常勤講師）

『三輪物語』と「寓言」

【要旨】

熊沢蕃山の著した物語作品の一つである『三輪物語』は、これまで「神道」や『源氏物語』についての蕃山の主張を窺わせる資料として多用されてきた。しかし、和辻哲郎氏の『日本倫理思想史』における高い評価を除けば、ほとんどの場合は部分的な引用にとどまり、主著とされる『集義和書』『集義外書』等とは明らかに異なった文体による、一つの独立した作品として読むという視点を欠いていたように思われる。『三輪物語』や同じく蕃山の物語作品である『宇佐問答』は、思想的に対立する複数の登場人物が議論を行うという構成においても、寺社名を冠した題名においても、『清水物語』や『祇園物語』のような仮名草子の「教義問答体小説」を意識していることが推測され、その物語という形式自体が蕃山の思想においてどのような意義を有するのかという問題について検討する必要がある。

そこで注目されるのは『三輪物語』内で展開されている「寓言」論であるが、それは一方では日本紀神代卷等の物語を解釈するための理論であり、また一方では『三輪物語』等の物語作品を自身が制作していくための理論ともなっている。そこにはやはり『鑑草』のような物語を用いて自身の学問を広めようとした師、中江藤樹からの影響を考慮することができよう。しかし、藤樹と比較すれば、蕃山は「寓言」という概念をより自覚的に用いていたらしい。とくに仏教と「寓言」との関係について、明らかに藤樹とは見解を異にしているのである。また、荘子に由来する「寓言」という概念の重視は、老荘に対する蕃山の高い評価とも関わっている。

『三輪物語』については成立の背景や受容の過程など、今なお不明な点が多いものの、「学者」としてのいわゆる「学問」的なそれとは異なる行為遂行性を持つ著作として読まれねばならないのは確かであろう。本発表では『三輪物語』において繰り返される虚実の議論に注目し、「寓言」という切り口から作品論を試みたい

今高義也（宮城学院中学校高等学校）

「柏井園におけるキリスト教経験と文明評論」

【要旨】

植村正久門下で、キリスト教史家・新約学者の柏井園(かしわい・えん 1870－1920)は、日本人による最初の本格的なキリスト教通史として広く読まれた『基督教史』(1914年8月、日本基督教興文協会)の著者として知られる。柏井は自由民権運動と関わりの深い高知基督教会で受洗(1887年)、同志社に学んだ後、植村に請われて上京、明治学院で教鞭を執る傍ら『福音新報』の編集に携わりつつ論説・随想・詩を寄稿、1903年—05年には米国ユニオン神学校に留学し、帰国後は基督教青年会の月刊誌『開拓者』を創刊(1906年)、1914年5月には同志と共に『文明評論』を創刊して健筆を揮った。著訳書は20冊を超え、没後二期にわたり『柏井全集』が編集・刊行されている(正・続全12巻)。

けだしキリスト教界内における神学研究／教育活動と、教界外の国家・社会をも視野に収めた言論活動とは、柏井において常に〈車の両輪〉としてあった。この背景に、師・植村から受け継いだ〈社会の木鐸〉としての責任意識があることは論をまたないが、今回特に注目したいのは、その「文明評論」の根底に伏在していたとみられる「信仰」と「経験」をめぐる柏井独自のキリスト教理解である。けだし内的経験としてのキリスト教信仰と外的経験としての時代状況とは柏井の中で深く結びついており、その思想的・神学的営為と言論活動の源泉となっていた。

本発表では、『文明評論』に掲載された柏井の論説を主な手掛かりとして、柏井におけるキリスト教経験と文明評論的言説の内的関連について検討する。その際、信仰の「実験」を重んじつつ時代批判の言論を展開した内村鑑三との対比を通し、日本プロテスタント思想史における柏井の位置についても検討したい。

岩根卓史（立命館大学大学院生）

「国歌八論論争と堂上歌学—思想史的アプローチからの試みとして—」

【要旨】

荷田在満（1706－1751）は、『国歌八論』（1742）において、「歌とのみ見ゆるものを、歌にあらずといはんならば、何ぞその歌にあらざるといふ、当然の理を以てこれを責めざる。論難には及ばずして、妄りに堂上といふ目を以て地下に誇ること、大むね今の官家の人の風なり」と述べており、当時における堂上歌学に対して批判を加えていることは有名である。

このような在満による堂上批判をいかに考えるべきだろうか。というのも、在満の思想的来歴について考えるならば、在満は「堂上」とけっして無関係ではなかったからである。1738（元文3）年に、桜町天皇（1720－1750）が「朝儀再興」の意図により催行した、元文度大嘗会について、在満は有職故実家という立場から、江戸幕府による内命という形で、式次第を内密に記録しており、またその式次第に関

しても、在満は『大嘗会便蒙』(1739)で考察を行っている。このことから分かるように、在満は近世朝廷や公家知識人をめぐる動向について、常に注意を向けていたと考えることができる。そしてこの意味において、武家社会という身分的世界の中で、当時は秘密裡に行われた、国歌八論論争も、「堂上」における政治的動向や学問的動向とは無縁ではなかったと言えるだろう。

また、従来の堂上歌学をめぐる先行研究を検討すると、とりわけ、宮廷サロン風の雅文芸が隆盛したとされる江戸前期に論考が集中している。しかしながら、「地下歌人の成長」という視点から捉えられることが多い、江戸中期から江戸後期にかけての堂上歌学をめぐる問題は、未だに山積している研究課題が多いと思われる。

以上のような問題関心にに基づき、本報告では、国歌八論論争の思想的背景を探るために、堂上歌学との関係について、近年における江戸文学史研究の成果も加味しながら、思想的アプローチとしての模索を試みるものである。

殷曉星（立命館大学大学院生）

「徳川日本における中国徳教書の受容——明清聖諭・聖訓を中心に」

【要旨】

明・清両朝の皇帝が代々頒布した聖諭・聖訓を代表とする中国徳教書は、道德倫理を講ずることを通して日常生活に直面する様々な問題の解決を図り、強い実効性を持ち、六百年余りの長い時間に、中国・朝鮮王朝・徳川日本を含める東アジアの前近代世界において庶民教化に大いなる機能を果たした。中に提唱された徳目は近世東アジアに存ずる共通な道德追及となり、徳川日本の教訓科往来物などに大いに影響を与えた。しかし、中国徳教書の伝播・受容に関する研究は、『六諭衍義』など一部の代表作に限られ、書物自体と中国特有の郷約制度との葛藤を無視し、教訓と強制を兼備する組織面の属性に対する考慮が充分に至っていない不足点が指摘できる。また、一国史の範囲に限られ、近世東アジア世界の全貌を把握する目線を欠いてきたといえる。近年、史料の発掘とともに、教化関係の聖諭・徳教書は新たな研究素材として注目され、思想史学研究に新しい課題を与え、徳川日本における中国徳治思想に対する再検討が必要となっている。

本報告では、同一の書物がその各地域に伝播する過程における異同を分析することによって、明清王朝から渡来した聖諭・聖訓の徳川日本における受容の実態を捉えることを目指す。特に寛政期以来の『聖諭広訓』を代表とする中国徳教書の受容に関して考察する。『聖諭広訓』については、すでに陶徳民・高岸晃夫の書誌学・言語学の角度からの研究があるが、本報告ではテキスト分析を重視する。そして、早川正紀・荒井公廉などの庶民教化の現場に立つ幕府代官・地方の知識人がそれらの聖諭を改編、または模倣して編集した教訓集を参考し、その原作に対する修正作業から、聖諭・聖訓を活用する過程における彼らの理解と考えを明確にすることによって、中国徳教書の徳川日本における受容の立体像を捉えようとする。

植村和秀（京都産業大学）

『國體の本義』対『日本文化の問題』——東洋文化と西洋文化の再編成をめぐる対立

【要旨】

本報告の要点は、西田幾多郎の『日本文化の問題』が、文部省編纂の『國體の本義』に対する反論であった、という経緯の指摘にある。そしてその経緯を、東洋文化と西洋文化の再編成という同じ問題に対して、『國體の本義』と『日本文化の問題』が、どのように異なる解答を出したのか、という視点から把握しなおしてみたい。

『國體の本義』は昭和十二年に刊行され、敗戦までに二百万部以上が流通した。しかし、その内容は首尾一貫せず、難解な説論の連続となっている。これは、文部官僚や編纂委員たちの間で意見の統一がなく、予算執行の都合により意見調整の時間もなく、拙速かつ無難に作成されたためと報告者は推定している。ちなみに、その詳細については、本年刊行の『岩波講座日本の思想第二巻 場と器』所収の解説を参照されたい。

ただし、それでも文部省刊行の定義として、『國體の本義』は、昭和十年代の思想統制とプロパガンダを考える上で逸することのできない書物である。そして、その刊行に深い懸念を抱いたのが哲学者の西田幾多郎であった。西田は、文部省が同省直轄の国民精神文化研究所を用いて思想統一を試み、質の低い文教政策を推進しようとしていると判断し、あえて批判に乗り出したのである。

西田が批判したのは、まずもって『國體の本義』の内向き・後向きの姿勢であった。世界的世界の時代であるのに、世界文化の創造を目指すことなく、日本文化の特殊性に自己満足することへの批判である。そしてさらに、その安直な姿勢にも西田の批判は向けられる。『國體の本義』は、西洋文化を道具として活用すると述べ、それがどのようにすれば可能かを述べない。西田はその方法を問い、西洋文化と東洋文化を真剣に学びなおすことを要求する。昭和十五年刊行の『日本文化の問題』は、このような経緯から読み解きうる書物であり、西田流の文化再編への提案なのである。

岡佑哉（愛知学院大学）

「戦間期における内田良平の思想と大日本生産党—「国体」論を手がかりに—」

【要旨】

本報告は、内田良平（一八七四～一九三七、黒龍会主幹、大日本生産党総裁）の戦間期における「国体」論を通じ、党結成の背景と総裁としての行動の前提、すなわち当該期「右翼」運動の形成・展開の様相を思想の面から考察するものである。

なぜ、内田良平なのか。従来の「右翼」研究は、①北一輝・大川周明など「著名」な人物の分析に偏り、②また、「ファシズム」論・「革新派」論などの研究潮流の中でも、軍部・政治家・官僚とは異なる在野の立場ということもあり、日本の「ファシズム」化、もしくは「革新派」中心の政治過程の副次的要素とされ検討が不十分という課題があった。

近年は、いわゆる「皇国史観」などの「国体」論や、北・大川などに限らない「右翼」

運動の再検討（原理日本社研究、近衛新体制の批判勢力である「観念右翼」論など）が進捗した。大日本生産党は、アジア主義者として知られた内田が結成し、その死後も日中戦争期の対外硬運動や近衛新体制批判を行うなど、「観念右翼」の典型ともいえる団体である。

しかし、対外問題に関心の重きを置くアジア主義者の内田が、なぜ国家改造をめざす大日本生産党を組織したのか、また、総裁期の思想についても、先行研究では十分検討されておらず、内田の「国体」論も等閑視されてきた。だが、「右翼」にとって根本思想ともいえる「国体」論こそ、その行動の背景を探る素材として適切と考える。

そこで本報告では、内田の「国体」論にもとづく言説の実態を跡づけし、戦間期における「右翼」運動の形成・展開の思想的前提を検討する。具体的には、①大日本生産党結成の背景を内田の普選論（「純正普選」論）から、②大日本生産党総裁としての行動の前提を神話論（内田著『国体本義』）や天皇機関説批判などから考察したい。

岡安儀之（奥羽大学非常勤講師）

「福地源一郎における「自治」」

【要旨】

福地源一郎（桜痴、一八四一～一九〇六）は、一八七四年、『東京日日新聞』の入社と同時に社説欄を常設して、自らの政論を読者に鼓吹し、「新聞記者の開祖」（徳富蘇峰）とまで評された人物である。しかし、明治初期の言論界において、大きな影響力を誇った福地ではあるが、これまでの評価は、「御用記者」、「漸進主義者」、「保守主義者」などと言った非常にネガティブなものがほとんどであった。そのため福地という人物の歴史的・思想的意義を問い直す試みは、積極的に行われてこなかったと言ってよい。この背景には、福地を表象してきた「漸進主義」や「保守主義」という用語が、長く負の要素として解釈されてきたことが大きい。そして、こうしたタブーが、戦後の日本思想史研究の進展を阻害してきたことは否めず、再検討を必要とする問題であると考えられる。

福地は、『東京日日新聞』に入社すると漸進的国会開設の立場から、地方レベルでの議会制の導入を力説した。それは、近代的民主政治を構築するには、国内の幅広い意見を吸収し議論する必要がある、民意を基盤とした政治が運営されることで、社会が安定していくという理解があったためである。そして、その実現のために、「国民」としての「愛国心」や政治意識の妨げとなる「卑屈」心を除去しなければならず、「日本は日本人総持ちの日本なり」という「自治」の必要性を強調するのである。こうした主張は新聞記者の傍ら、地方官会議や東京会議所への積極的な参画という形で具現化され、その後彼は東京府会の初代議長に選出されている。このような事実は、福地の政論に対する高い信望を示しており、明治初期の国民国家論を考える上で、彼の思想が決して等閑視できないことを表している。本発表では、かかる問題意識の下、当時の代表的な思想家にも目配りをしつつ、「自治」をめぐる福地の思想を検討していく。

大野ロベルト（国際基督教大学大学院生）

「『もののあはれ』再考——『土佐日記』を中心に——」

【要旨】

今春、東京のサントリー美術館で「『もののあはれ』と日本の美」という展覧会が開催された。そのタイトルからもわかるように、「もののあはれ」は「わび」「さび」などと並ぶ「日本的な感覚」として、今日までその命脈を保っている。だがそのような感覚の常として、一人歩きをしてしまっている感も否めない。「美しいものを見聞きしたときに起こってくる情感」というようなものであれば、すべて「もののあはれ」で片づけてよいのだろうか。

言うまでもなく、「もののあはれ」という概念にはっきりと市民権を与えたのは江戸時代を代表する国学者、本居宣長であった。宣長はとくに「もののあはれ」を体現する文学作品として『源氏物語』を挙げ、その主張は『紫文要領』や『源氏物語玉の小櫛』に結実している。これにより、「もののあはれ」と『源氏物語』は切っても切れない関係となった。

しかし「もののあはれ」という言葉の初出は、『源氏物語』より半世紀以上古い、紀貫之の『土佐日記』においてなのである。宣長は『石上私淑言』において「もののあはれ」を含む「あはれ」の問題について広く論じているが、紀貫之には言及しながらも、『土佐日記』におけるそれについては論じていない。

本発表では、まず『土佐日記』に示される「もののあはれ」のあり方を検討したい。それは和歌という表現形式と切り離しがたい感覚であった。また「もののあはれ」は「知る」ものであり、誰にでも獲得できるものではなかったのである。このことを確認した上で、『古今和歌集』仮名序に見られるような当時の人々の文学観を整理し、それを宣長の主張と突き合わせることで、「もののあはれ」をとりまく思想史の一端を浮き彫りにしたい。

小田直寿（関西大学大学院生）

「家永三郎における理想主義の展開——当為の立場と日本国憲法——」

【要旨】

家永三郎（一九一三—二〇〇二）は、思想史を中心として幅広い視野をもつ歴史学者であるとともに、教科書裁判で広く知られる護憲思想家・運動家でもある。だが活動範囲が広汎であるだけに、家永自身が自伝『一歴史学者の歩み』他の記述のなかで繰り返し訴えているにもかかわらず、家永の思想の核心がどこにあり、それが家永の幅広い業績とどのように関わっているのかということは、まだ十分に明らかにされていないと言いがたい。

発表者は、既発表の「『思想家＝思想史家』家永三郎の基本的立場について」（関西大学『哲学』第三一号、二〇一三）において、家永三郎を一貫する立場が、仏教とキリスト教とに則る「否定の論理」にもとづく「逆説的実践」であることを指摘し、それが新カント派の当為 Sollen の論理をつうじて日本国憲法と結びついていることにも言及した。本発表

では、家永の思想の根底をなす否定の論理と、実践の基準である日本国憲法との関連をより深く理解するため、当為の立場と日本国憲法との関連の具体像の解明に取り組みたい。

これまでの研究としては、まず、家永三郎の戦後の思想的立場の原型が、旧制高校時代に当為を論じた「国家哲学の根本問題について」に見られることを指摘した、松永昌三の論究が挙げられる。ただし松永の論究は一九七九年と同時代的であるため、家永の生涯を通観してはおらず、家永の発展相の解明が行われていない。この点については、当為の立場について高校生時代からの思想的発展があったことを指摘した江村栄一の講演の記録が挙げられるが、一般的な新カント派の思想を、やや図式的に家永にあてはめている憾みがある。

そこで本発表では、時期を追って実証的かつ体系的な解明を行いたい。具体的には、戦前戦中における理想主義の獲得、戦後すぐにおける理想主義の拡張、一九七〇年前後における理想主義の展開、将来へ向けた理想主義の展望という順で検討を進めてゆきたい。

川合大輔（名古屋大学大学院生）

「大衆の名のもとに——一九二〇年代初頭における社会主義運動——」

【要旨】

近代日本において、大衆社会が成立したのは、一九二〇年代であると考えられている。大衆社会の特徴は、一般論として、産業の高度化に伴って、諸組織が巨大化し、機能重視かつ非人格的な機構と官僚制化が進行したこと。都市化の進行によって、地域独自のまとまりが瓦解していったこと。その他、科学技術の発達によって、大量生産・販売・消費が進展し、情報化社会が促進され、交通手段も発達していったことなど、生活構造・様式の変化が挙げられる。

ところで、従来の多くの大衆社会論は、オルテガ・マンハイム・フロム・リースマンなどから、日本人の手になる二〇年代の日本思想史研究にいたるまで、大衆社会と称されている世界のあり方について考えられたものだった。これに対して、本発表が考えどころとしたいのは、なぜそのような社会を〈大衆〉社会と称したのか、という点にある。

mass の訳語として大衆が当てられたことは、誰でも知っている。しかし、それではなぜ、もともと仏教用語であって、一〇年代までは基本的に、たとえば『六條学報』などの仏教研究誌上で使用されていたにすぎない大衆——この場合は、だいしゅ、と発音することが正しいにせよ——という言葉が、訳語に選ばれ、二〇年代に瞬く間に広まったのか。これは不思議なことではないだろうか。

語誌を網羅的に突き止めるのは困難が予想されるので、本発表ではひとまず、二〇年代に入った頃の一九二一年五月に創刊された『週刊新聞 大衆運動』を中心に考えてみることにしたい。『大衆運動』については、管見の限り、先行論がほとんど見当たらない。しかし、高島素之ほか、それなりに知られた人物が執筆している。創刊号において、「大衆運動とは、(中略)我々の考へた社会主義運動の一つの形態であつた」とほこる彼らの思想・

運動を手がかりに、大衆社会と名づけられていった経緯を探りたい。

邱璐（中国・河南大学外語学院）

『孟子受容史の研究』についての若干補遺

【要旨】

井上順理先生の『孟子受容史の研究』は、中世までの孟子受容の様子を克明に描き出す一大研究作である。一般的に、革命と民本主義を鼓吹する『孟子』は宋学が入るまでに、敬遠されていたと思われる。井上氏は、資料の精査を通して、中世以前にも、『孟子』が忌避されたではなく、素直に受容されていたという画期的な論を唱える。

しかし、小川剛生の指摘通りに、「これまでの研究は字句に現れた影響関係の指摘に止まり、受容する側が孟子のどのような内容に惹かれたのかは、依然として見えてこない。一方、この時代の公武の政治思想を論ずる時、しばしば孟子の影響が取沙汰されるが、たまたま表面に現れた歴史的な現象を孟子の主張に附会したに過ぎないことが多い。いま必要なことは、中世の知識人が、そのテキストをいかなる脈絡で引用し、何を読み取ったのか、あるいは、いかなる内容に注目し、何を作り出したのか、という受容の具体的な様相について吟味することである」（小川剛生、『二条良基研究』、笠間書院、平成十七年、四三九～四四〇頁）

井上氏の研究は主に文献における『孟子』と関係がある言葉を摘出し、まとめるということを中心にして、『孟子』のいかなる思想が受容されたかについての分析は不十分である。筆者は、井上氏の研究を基礎にして（妥当でないと判断するところも指摘する）、文献における孟子受容の資料を整理し、分類して、孟子受容の全体像を究明しようとする。小稿は、一つの試みである。中世の受容研究は膨大な資料を精査しなければならないので、課題として残して、本稿は中世以前の孟子受容の全体的な様相を整理しようとするものである。

小林加代子（お茶の水女子大学大学院生）

「近世「忠臣蔵」に見る「義」について」

【要旨】

本発表は「忠臣蔵」を題材に「義」について考える。近世日本において「義」は武士の守る倫理として認識されていた。例えば大道寺友山は「武士たらむ者は、義不義の二つをとくと心に会得仕り」とする。こういった例を受け、新渡戸稲造は日本の伝統的価値観を紹介する際、日本人の行動を規制する厳格なる倫理として「義」を取り上げた。このように「義」とは規範意識を示すものである。

赤穂浪士は、「義」の体現者であると評価され、赤穂義士と称される。つまり彼らの行為は正しいものと認識された。その一方で、彼らを「義」とするか否か大いに議論されたこともよく知られている。主な論点は討入の正当性に関してであり、「不義」とする論者においては特に国家秩序を重んじる立場からその違法性を問題とした。

そのような中でも「義」であるという評価が定着したことは、支配階級である武士と被支配階級である民衆の価値観の相違として説明される。しかし、時代が下ってそれまでの支配関係が失われても、赤穂浪士を「義」とする傾向は変わっていない。

つまり「義」は国家秩序を司る法倫理とは異なる価値観で規定される正義であり、なおかつそれは一定の時代や身分に特有のものではない。したがって、赤穂義士という評価の定着は日本人の根底にある正義の意識と関わるものと考えられる。

以上を前提に、赤穂義士像成立の初段階である近世の「忠臣蔵」を取り上げ、そこに描かれる義士像から、「義」の具体的な意味内容を分析する。分析対象としては、赤穂事件作品化の草創期に生まれた『碁盤太平記』、赤穂事件を「忠臣蔵」として定着させた『仮名手本忠臣蔵』、及び『仮名手本』以後の代表的な「忠臣蔵」である『太平記忠臣講釈』を扱う。そして「忠臣蔵」が作品として成熟していく中で、「義」の意味内容がどのような系譜を辿るのかに着目することによって、近世日本における正義の意識の思想的背景を明らかにしたい。

蔡鳳林（中国・北京中央民族大学）

「古代日本における中華思想の形成について」

【要旨】

古代の中国人は黄河流域における高度文明の地域を「化内之区」とし、周辺の文化の低い地域を「化外之地」と見なしていた。「化外之地」に居住する住民は「蛮夷戎狄」と貶され、中国の支配を受けるのが当然だと認識していた。これが「中華思想」である。これは儒学の主旨の一つである「礼」を基準として、中国とその周辺民族との関係を処理する中国伝統的政治思想である。後、この思想は国際関係にも利用され、中国人は自国を文化の高い国——「中華」と見、他国は衆星が月を取り囲むように中国に朝貢しなければならないと一方的に認めていた。

古代日本王権と国家の形成は、中国を核とする古代東アジアの歴史と不可分の関係がある。古代日本の歴史は東アジア地域の政治的情勢との連動において展開し、東アジアの政治と文化を離脱した独自の日本古代史は存在しない。

推古朝から八世紀にかけては、日本は古代国家から律令国家へ移行する時期だが、隋唐王朝の成立や新羅の勃興など、東アジア大陸と朝鮮半島からの「外圧」がその主要な原動力であろう。古代日本においては、元来、「中華思想」が存在したはずもないが、主に八世紀以後、日本は自ら律令国家の建設を完成し、唐と肩を並べられる「中国」・「中華」となったと思っていた。そして、その時期から日本式の「中華思想」も生まれたであろう。要するに、文明と国力の格差の激しさによって、古代においては、日本人は終始国家競争意識で自国を中国と対等的に存在させるべく、せっせと中国に学び、中国の真似をし、また、中国と「中華」・「中国」の地位及び名分をも争奪した。これが古代日本における「中華思想」出現の主な思想的土壌であろう。古代日本における「中華思想」の形成は、また、東

アジア共通文化である儒学の影響と「神国」や「万世一系」などの日本人の国家自慢感とも繋がるだろう。

清水邦彦（金沢大学）

「地蔵の化身」観の変遷

【要旨】

日本初の地蔵説話集、『今昔物語集』第十七巻には以下の説話がある。

戦フ間、胡録ノ箭皆射尽シテ、可為キ方モ無カリケルニ、心ノ内ニ、「我ガ氏寺ノ三宝、地蔵菩薩ツ、我ヲ助ケ給ヘ」ト念ジ奉ル程ニ、俄カニ戦ノ庭ニ一人小僧出来テ、箭ヲ拾ヒ取テ、諸道ガ父ニ与フ。・・・氏寺ニ詣デテ地蔵菩薩ヲ見奉ツルニ、背ニ一筋被射立タリ。（第三話）

武器を渡すだけとはいえ、今であれば殺人幫助に当たるであろう行為を、地蔵の化身である小僧が行っている訳である。佐藤弘夫は、こうした「だれとも等距離の関係を維持する開かれた信仰対象」ではなく、「氏族や「国」といった限定された血縁・地縁と、切っても切れない関係を有する」仏・菩薩を〈日本の仏〉と呼んでいる。

時代が下り、妙幢浄慧『地蔵菩薩利益集』（一六九一年刊行）になると、地蔵は大法師として、実戦に参加するようになる。

敵みかたたがひに骨をくたくところ何ともなく大法師一人。忽然とあらはれいで。鐵棒をもつてさんざんにたたかへり。・・・いそぎかの（註一泉州岸和田天性寺）地蔵堂にまうでて。尊容を拝し見玉ふに。こはいかに多の矢を射たてられさせ玉ふのみならず。鉄砲のあと又かずもなし。（第二巻第十話・私架蔵本による。伝説によると、天正年間の話）

「小僧」→「大法師」、「武器を渡すのみ」→「実戦参加」という変化の理由は何なのだろうか？ 無論、戦国時代は、これまで以上に過酷な戦の時代であったという時代背景が理由の一つに想定されるであろうが、本発表では、中・近世の説話集・霊験記絵に於ける「地蔵の化身」の姿や職能を確認した上で、これ以外の理由を探求してみたい。

清水則夫（明治大学）

「鈴木貞斎の闇斎・仁斎批判と「心」の主張について」

【要旨】

本発表では、鈴木貞斎（1675～1740）による山崎闇斎や伊藤仁斎に対する批判と、貞斎の「心」の修養の主張を分析する。またそのような思想が出現することの意味を考察し、近世日本朱子学の性格を再検討する。

鈴木貞斎は闇斎学派の異端児とされるが、その知名度は低く、先行研究も少ない。しかしその思想には注目すべき点がある。彼ははじめ浅見綱斎の門下だったが、綱斎没後は室鳩巢や三宅尚斎に教を受けた。思想的には朱子学を奉じ、陽明学には批判的だった。また

『日本書紀』を仏教的だとして否定しつつ、しかも神儒一致論を主張するという、特異な思想家であった。

彼は当時の主要な儒学者のほとんどを批判しているが、特に闇齋と仁齋を繰り返し批判している。その批判の一方で、貞齋自身が強調したのは「心」の修養であり、「静坐」であり、「向裏」の格物であった。逆に言えば貞齋は、闇齋も仁齋も「心」を軽視しているとしたのである。

ここで注目されるのは、闇齋のような朱子学者が、同じ朱子学者から「心」を軽視すると批判されたということである。しかも貞齋自身は、陽明学者ではなく朱子学者であることが、この問題を一層複雑なものとしている。中国思想史では主に心学者からなされた批判が、徳川思想史では朱子学者によってなされたのである。

貞齋の思想が、徂徠学の出現に代表されるような、享保期の時代状況に規制されていたことは事実であるが、他方でそれは、先行する朱子学者に対する通時的な問題意識の所産でもある。これらのうちの後者に注目することで、近世日本朱子学が辿った変遷とその意味を明らかにしたい。

柴田一郎（東北大学大学院生）

「保田與重郎の神道観——戦時下における「事依さし」の道——」

【要旨】

文芸評論家の保田與重郎（一九一〇～八一）は、雑誌『日本浪漫派』（一九三五～三八）や『コギト』（一九三二～四四）を創刊し、マルクス主義運動の崩壊により混乱していた一九三〇年代の文壇を主導することで、転向者の思想的母体としての役割も担っていった。保田はドイツ・ロマン主義の文学理論を戦略的に利用し、神話や古典を媒介として日本の始原を再構築し、新たな皇統美論を確立することで文壇における「日本への回帰」を促進したが、保田の理論的支柱は日中戦争以降、次第に国学を下敷きとしたものへとシフトしていく。「国学の古典論」と自命した保田の批評は、思想宣伝としての「日本精神論」に対する批判であり、古典の真の継承者（国学者）として「皇神の道義」を確立し、戦時下において有効な精神を古典から引き出しそれを人心において回復させる試みであった。「皇風の世界化」にも有効とされた保田の古典論は、しかしアジア拡大の構想が非現実的になるにつれその目的の変更を余儀なくされ、国学の眼目は「神代の手ぶりとおきてを学ぶ」点にあり、「神州不滅」に必要な道德の確立こそが喫緊の課題であると保田は主張するようになる。『鳥見のひかり』（一九四五）において保田が主張したのは国学者が指摘したような「古道」の確立であり、保田は書紀に描かれた神武天皇の時代を理想的な祭政一致社会とみなし、「天職相続」に基づく私有制の廃した国家観を打ち出した。さらに保田は、鈴木重胤『祝詞講義』の解釈を元に、神勅において神、天皇、民が一体となって農を営む生活を、敗戦により一切が崩壊してもなお永久不変に残る「事依さし」に仕える神の道として構想した。戦時末期に至り「神霊の加護」を希求するようになった保田が、『鳥見のひかり』に

においてなぜ「古道」の確立を目指したのか。本発表では、神祇院主導の「敬神思想」とも異なる保田の戦時末期における神道観の内実について考察する。

柴田真希都（日本学術振興会特別研究員）

「中江兆民と内村鑑三——明治期〈共和主義〉の二つの表象をめぐって——」

【要旨】

中江兆民と〈共和主義〉との関連については、日本政治史や思想史の分野で周知されている。中江におけるルソー理解の特徴や、彼の「君民共治」型の共和主義思想については、明治10、20年代にわたる自由民権運動との関わりの中で、着実に研究されてきたといえる。

それでは内村鑑三と〈共和主義〉との関連についてはどうだろうか。内村と共和主義との結びつきなど聞いたことはない、という人は該分野の研究者の中でも少なくないかもしれない。事実、内村における共和主義—ここではひとまず英語の **republicanism** の適用範囲を想定されたい—の外貌や内実についてのまとまった論稿というのは確認されていない。本研究発表の目的の一つは、この内村における共和主義をめぐる諸表象を整理し、それらと彼の言動との関わりや、その思想史的な意味を問うことにある。

内村が、その〈共和主義〉に関わる言説を多く残したのは、ジャーナリスト時代とよばれる、日清・日露の戦間期である。キリスト教陣営の一員というよりは、いくつもの文化的事象にわたってアングロ・サクソン流の良さを説く知識人として、広く青年層の支持を集めていた頃であった。内村の共和主義ひいては共和国への志向は、理想の超越国家を視野に収めながら、この世における最良の政体、あるいはそれをもたらす人民のエートスを問う、という自覚的かつ批判的姿勢において提出されたものである。それは尾崎行雄の「共和演説事件」（1898年）などが起こる当時の社会的気風とも無関係ではない。

本研究発表の第二の目的は、〈共和主義〉という鍵概念を通じて、従来、あまり接点を見いだされてこなかった中江から内村への、ある思想史的な流れを検討することにある。とくに、中江において結実した、世俗的かつ政治参画的なフランス型〈共和主義〉と、内村において発出した、他界的かつ在野志向的なアメリカ型の〈共和主義〉との結節点を見いだすことが一つの課題となるだろう。

商兆琦（東京大学大学院生）

「田中正造の人間像」

【要旨】

これまでの田中正造研究には、二つの特徴がある。一つは、「思想史」が、「人物史」の研究と比べ、圧倒的に多いということである。もう一つは、「鉍毒事件から捉えた正造」や「明治史から捉えた正造像」が、「正造の目に見えた鉍毒事件」や「正造像から見えた明治史」と比べ、意外ほどに少ないということである。

なぜなら、「鉍毒＝明治の歪み」、「正造＝現代的意義の持ち主」という「価値判断」に基づき、「歴史」や「現実」を糾弾する手法が主流を占めているからであろう。だが、「個体」から「全体」を掴み、「現代的意義」により「歴史人物」を検討するアプローチは、必ず「個」を対象とする研究枠を超えられず、「全体像」・「客観性」が犠牲になるという大きな限界がある。

これまでの研究者は、ほぼその力点を田中正造晩年の思想や思想形成の分析に置き、その思想の「倫理的」な価値を追認する方向を取っていた。正造の人物像や思想像を彼の生きた時代の文脈に置き直すという作業がおろそかになったことは否めない。研究者と研究対象の間には、十分な距離が取られていないまま、田中正造の「意義」の探求を急いだので、研究者の心理感情を歴史人物の言葉や行動に投影し、田中正造を「21世紀の思想家」と評価して徐々に「神格化」してしまう恐れがある。

神格化された「正造像」を見直すために、正造の「人間像」を歴史の文脈に即して明らかにする必要がある。田中正造が、明治期の人物だったわけであるから、明治期の背景に置き直さなければ、理解できないだろう。

この目的達成のために、「同時代人の正造像」と「正造の自画像」という二つの方向から解明しようとする。「同時代人の正造像」とは、田中正造同時代人の抱いた正造像を指している。正造が生きていた明治期における様々な人々の捉えた正造像のありかたを探りだし、それぞれの重なりあえる部分を解明すれば、より安定的な正造像を改めて構造しうると考えられる。「正造の自画像」とは、「下野の百姓」という田中正造の「identity」の表現である。これを手掛かりにし、正造の財産、衣服、経済状況、そして社会的ネットワークという歴史世界に遡り、彼をその歴史世界に置き直して理解することを目指す。

東海林良昌（浄土宗総合研究所）

「江戸時代中期の法然伝研究——忍激と義山を中心に——」

【要旨】

忍激（1645－1711）と義山（1647－1717）は、共に江戸中期浄土宗の学僧である。義山は京都華頂山麓入信院に住み、中国浄土教祖師や法然の典籍の校訂作業を行い、忍激は同じく鹿ヶ谷法然院を創建し、律の生活を送りながら講学に勤しみ、明本大蔵經の対校録の作成を志す等多くの業績を残している。今回、忍激と義山の業績の中で注目したいのが、法然伝研究である。元禄10年（1697）、東山天皇は法然に対し「円光」という大師号を加諡する（この後、法然に対する大師号は、正徳元年（1711）中御門天皇よりの「東漸」以降五十年毎の遠忌に加諡され続けることとなる）。この出来事に伴い、忍激は『円光大師御伝縁起』、『円光大師御伝目録』、義山は『元祖円光大師行状画図翼賛』、『贈円光大師号絵詞』をそれぞれ著し、法然没後約百年後の室町期に編まれた舜昌『法然上人行状絵図』（以下『四十八巻伝』）についての研究を行い、同書が後伏見上皇の勅修によるとの認定を行った。それ以降『四十八巻伝』は、大正6年（1917）に醍醐

三宝院で古本の一つ『法然上人伝記』（醍醐本）が発見され、実証的な近代歴史学による批判的分析が加わるまでは、中世に成立した法然伝群の正伝としての地位を揺るぎないものとしたのであった。これまで忍激と義山の法然伝研究については、実証的な校訂作業が識者の注目を集め論じられてきたが、『四十八巻伝』が勅修と認定されたことの影響については、議論の余地があると思われる。本発表では、忍激と義山の行った法然伝研究の背景について、大師号加諡と貴顕に行われた進講の事例から捉え、また、それぞれの著作と関連書籍の関係から宗祖像の形成に与えた影響、さらにそのことが近世日本思想史上どのような意義を有するのかについて明らかにしたいと考えている。

菅原令子（東京大学大学院生）

『堀川波鼓』における武士」

【要旨】

『堀川波鼓』は妻敵討を題材とした近松門左衛門の人形浄瑠璃である。武士の妻お種の意図せぬ姦通から、その夫彦九郎が妻お種を討ち、続いて間男を討つ筋立ての芝居である。当時武家において姦婦・間男は死を以て処断されるべきであった。それが意図せぬ姦通であったとしても例外ではない。芝居のクライマックスは、それまで終始主人公であった武士の妻お種が姦通を経てもなお夫への恋情を語り自らの想いを証立てるために自害する場面であろう。不慮の姦通を経てもお種が夫への恋情のために死に至らなくてはならなかったのを見るとき、『堀川波鼓』は世話悲劇として成立している。

とはいえ町人を主人公に心中にまで至る恋を描いていた近松が、なぜ武士の妻を主人公とし、不慮の姦通という恋の一方的な挫折を仕込んで、お種の夫への恋を死に至る片想いとして描かなければならなかったのだろうか。お種と姦通相手との恋も「おもはずまことの恋」と表現されていた。ならばそのまま姦通相手をお種の恋の相手とし、二人がいずれはお種の夫に殺される恋をしたという筋書きで良かったのではないか。

お種が自害をした場面において彦九郎はお種に止めを刺す。その行為を近松は「武士の仕方のすゝどさよ」と称えた。彦九郎もまた、恋をして結婚した「様子ある夫婦」として、お種に恋情を抱いていた。しかしその恋は畢竟、恋の相手を斬り殺すことで、相手の想いを片想いのままに受け止め、自らの想いは「すすどさ」を以て絶ち切るしかないものであった。それが「武士の仕方」である。武士は主君のためにこそ死なねばならない。立派な武士とは全存在を懸ける恋が理解できる、恋の相手に足る存在でありながら、かつ恋のためには生きられない存在なのである。

『堀川波鼓』における恋の挫折は、武士における恋の必然的な挫折であると言えよう。本作における武士と恋との関係を検討することで、近世における武士像の一つを提示していきたい。

鈴木孝子（国際基督教大学）

「後期水戸学における鬼神論の位置付け：新井白石との比較分析を通して」

【要旨】

価値観が混乱した見通しの立たない時代ほど、人は純粋なものに魅了されるのかもしれない。後期水戸学の政治論はそのような感覚を率直に反映したものと言える。この学派の儒教解釈は、精緻な理論武装に基づいた国家祭祀と宗教政策、国家運営の指針が議論されている点に特徴がある。危機の時代の政治論である以上、国家の独立と秩序の維持が全面に出るのは当然の結果である。この姿勢は彼らの鬼神論においても同様であり、祖霊祭祀と宗教政策上の問題意識に基づいて展開され、思想統制を推奨する論述もある。これにより民間信仰および民俗学に関連する事柄は統制の対象として議論される傾向が強い。しかし、日常感覚に近い事柄を切り捨てて議論を展開することには、必ずリスクが伴うのではなかろうか。組織的な運動を拡大して長期的に進める上では、身近な習俗と神々への信仰心を根底に取り込むことが定石となる。古い宗教的ルーツを切り捨てて高度に抽象的な国家論を展開すれば、支持層が拡大しない実情に直面せざるを得ない。実感を伴う議論として個々人のレベルで認識されないからである。民間信仰と民俗学に対する宗教政策上の問題意識は社会共同体の定義と深く連動したテーマであり、後期水戸学の知識人が何を根拠に日本の独自性を論じ、日本の社会を維持する上で何を求心力に求めていたのかを精査する必要がある。

以上の観点から、新井白石の鬼神論と民間信仰への宗教政策上の問題意識を比較分析することとしたい。近代以降の日本の歩みを考える上で、この時期に何が切り捨てられ何が増幅されたのかを見極めることは有意義であろう。議論を深めるキッカケとなれば幸いである。

鈴木英之（早稲田大学）

「中世浄土教学形成過程における「偽書」について」

【要旨】

中世の浄土宗は、独立した統一教団としての形式を備えていなかったため、禪宗をはじめとした諸宗派から強く批判され、低い地位に置かれていた。こうした状況を憂慮した浄土宗学僧・了誉聖罔（一三四一～一四二〇）は、新たな教学や伝法制度を整備することで独立教団としての基礎をつくりあげ、宗の地位を向上させた。ここで注目すべきは、聖罔教学の根拠として引用された書物の中に、いわゆる「偽書」（仮託書）が多数含まれていたことである。

偽書とは、作者を伝説上の人物や、高僧、宗祖などに擬したものだが、中世においては、信用すべき権威ある書物として大きな影響力を有していた。聖罔も、法然や菩提流支、聖徳太子などの先徳祖師に仮託された書物を多用することで、自身の教学に正統性を付与し、その権威を高めていた。これは当時の神道書や寺社縁起などにも通じる、極めて中世的な

学問のあり方として注目されるだろう。

そこで本発表では、聖問の用いた偽書群（『麒麟聖財立宗論』『建曆法語』『弥陀本願義疏』『説法明眼論』など）の特色を概観した上で、それらの教学上の位置付けについて考察する。また聖問の高弟・西誉聖聡（一三六六～一四四〇）の著作にも触れ、その後の聖問教学の展開についても論じていきたい。上記の考察を通じて、中世の学問形成の一端を具体的に明らかにしたいと思う。

高橋禎雄（東北大学）

「松宮観山の兵書解釈」

【要旨】

日本近世では様々な兵学の流派が生まれ、また数多くの兵学書が著されたが、兵学は同時代の儒学者からは批判の対象として捉えられていた。掘景山が「人に勝つことを専とする」（『不尽言』）と捉え批判しているのは、その代表例である。かかる批判が現れるということは、裏返せば思想領域として兵学が確固として存在していたということである。とりわけ山鹿素行の兵学については、周知の通り戦前からの研究の蓄積は膨大なものである。

この兵学については近年、儒学との関係から対立や媒介など様々な視点から明らかにされた点は実には多い。対立と媒介の地点に位置づけられることもある荻生徂徠が『鈴録』で各流派の兵学について批判を加えていることも有名である。反徂徠学者として現在再び知られるようになった松宮観山が受け継いだ北條流兵学について、徂徠は批判の対象の一つとして、北條流の名前を挙げている。ところが北條流兵学の内容については不明な部分が多い。石岡久夫氏の大著『日本兵法史』は戦前の陸海軍有志の研究活動を土台とした堅実な業績であり複雑きわまりない諸流派の分類・体系化に大きく寄与し、この領域の見通しを良くしたが、反面、氏が取り上げた史料をはじめとして一現在閲覧ができない氏の個人蔵のものを中心として一よくわかっていないことが多く、その後の研究を阻害している部分が大きいことも事実である。私の発表では北條流兵学について取り上げることとする。

この流派の始祖である北條氏長の主著『士鑑用法』は書物の性格上各種の註釈書が著された。中でも松宮観山の『士鑑用法直旨鈔』は有名ではあるが、今回は旧海軍兵学校に所蔵してあった北條流兵学書の註釈書も用いて観山の兵書解釈の特徴について明らかにするとともに、日本近世を通じ流派内部で『士鑑用法』は、どのように継受されたのかという点についても言及したい。

高橋恭寛（東北大学）

「中村惕斎における修養論」

【要旨】

中村惕斎（一六二九～一七〇二）は、寛文期から元禄期にかけて、京都で活躍した「朱子学者」である。当時篤実な人間性や博学を評された儒者であった。惕斎の博学は、『訓蒙

図彙』という所謂「百科全書」の編纂をはじめ、度量衡、音律、天文地理など様々な書物をのこしていることからよく知られたところであった。また『四書示蒙句解』をはじめとした儒教経典を読み下した書籍を刊行し、儒書普及にも一役を担っている。

このような元禄期に一世を風靡した中村惕斎について、先行研究では『四書示蒙句解』などの刊行によって出版文化に寄与した人物として取り上げている。また、葬祭礼について論じた『追遠疏節』『慎終疏節』や女子教訓書『比売鑑』などを用いて非火葬論や儒仏論における惕斎の独自性が解明されている。

ただ、この一方で、惕斎の学問の中心に位置していたであろう「朱子学」自体は、ほとんど分析対象にされてこなかった。それは、惕斎の「朱子学」が極めて穏当なものであり、仁斎や闇斎のような独創的な儒学理解を有していなかったことに起因すると思われる。

しかしこれは、惕斎なりの「朱子学」理解が無かったことを意味する訳では無い。すなわち、中村惕斎という元禄期の儒者の関心に従った「朱子学」の説き方が存していたことは否定出来ない。惕斎なりの重点の置き方があったであろう。

そこで本発表では、同時期に活躍していた闇斎学や仁斎学などと一線を画してどのように「学問」を修めることを論じていたのか、改めて考察することを目的とする。惕斎の学問の特色を明らかにすることは、同時に、17世紀後半の京都における学問事情の一端を明らかにすることへと繋がるのではないだろうか。

丹波博紀（和光大学非常勤講師）

「滝沢克己と六〇年代末——ベトナム反戦・大学闘争・そして水俣——」

【要旨】

一九六〇年代、世界は、日本は、大いに揺れていた。一九六四年七月、ベトナムで北爆開始。写真家・岡村昭彦は単身ベトナムにわたり、その様子を「戦争は木を家を街を、そしていたいけな子さえも焼く」と世界に知らせた。一九六八年八月、プラハ市内にソ連軍が侵攻。それを目撃した加藤周一は「圧倒的で無力な戦車と、無力で圧倒的な言葉」と伝えた。一九六八年九月、厚生省は熊本水俣病を公害認定。この発表はのちに地獄の釜のフタが開いたように評される。現在でも水俣病は終わらず、その被害者数は全国二〇万人以上ともいわれる。

もちろん、これらの事柄の中心で動いたのは抽象的なものごとではない。何よりも多くの人びとが、動き・働いた。また、それらに問われ、動き、思いなし、自らを問うた。こうしたことを考えるにつれ、私は殊に二〇一一年、三月一日以降、当時のそうした有り様を改めて深く捉える必要があると考えるようになった。その際、特に重要になるのが哲学者・滝沢克己なのではないか、そう考えるようになった。

西田幾多郎、カール・バルト、宇野弘蔵を師にもち、九大哲学科で教えていた滝沢は、当時の状況の中で積極的に動いていた。一九六八年六月、滝沢五九歳の時には、九大構内に米軍機が墜落し、翌年一月に何者かによって撤去されたが、滝沢はこれに徹底して抗議

し、二度のハンストを敢行した。

こうした滝沢の行動と思想は全国に伝えられ、当時の人びとに少なからぬ影響を及ぼした。例えば山本義隆は「一方で反戦闘争に携わりながら他方では平和な研究室で素粒子論の研究に従事していることのある種の居心地悪さを感じていた当時の私にたいして、それは訴えるものがあつた」と記している。むろんここで重要なのは、滝沢の一体何が訴えたのか、また上記から読み取れる両者の齟齬が一体何なのか、である。

本発表では六〇年代末の時代状況を踏まえながら当時における滝沢思想のひろがりと有り様、現在への示唆を考察したい。

寶兆鋭（岡山大学大学院生）

「山鹿素行と丘文荘との関係について——山鹿素行における異端対策の成立を中心に——」

【要旨】

山鹿素行（元和八年～貞享二年、1622～1685）における風俗教化を中心として「礼」・「教」・「刑」を併用する異端対策は、暴力的な手段で異端を統制するという従来の異端対策とは異なっている。素行は、異端が隆盛しえる根本的原因について、キリスト教や仏教などが日本に侵入し、聖人による教化が衰微し、「面々自分として道徳を定め」（『山鹿語類』巻第七、『山鹿素行全集（思想篇）』第五巻による）という価値混乱の状態となり、異端がこの機会に乗じて、その教説を民衆の日常生活の隅々に広げていたことにあると考える。この原因を究明せずに、「其の居を壊り其の書を火」く暴力的な方法は、従来の異端排撃運動のなかで機能しないのみならず、「悪まるる者は人必ずこれを愛す。攻むれば人必ずこれを守る」（『山鹿随筆』第十一巻、「全集」第十一巻による）という「人情」のありように反するため、しばしば異端の反発を招致する。素行の異端対策は以上のような認識に基づいて成立するのである。

この異端対策は、聖学時代の著作ではよく論じられている。しかし、聖学時代より早い朱子学中心時代の著作である『修教要録』においてもこれとよく類似する部分がある。また、この部分は素行が中国明代中期の知識人官僚である丘文荘の『大学衍義補』から引用したものである。そして、異端の根治と風俗教化とを関連させる思惟モデルからみると、丘文荘と素行には共通するところがある。そのため、素行の異端対策の成立には、丘文荘の『大学衍義補』からの影響があると考えられる。以上の理由に基づいて、両者の比較検討が必要である。

本発表は、丘文荘と素行の異端対策との対比を手掛かりとして、素行の異端対策の成立と彼の朱子学中心時代における中国思想の受容との関係を明らかにしようとするものである。

長尾宗典（国立国会図書館）

「高山樗牛の「美的生活」論」

【要旨】

高山樗牛（一八七一～一九〇二）の評価は、いまなお毀誉褒貶に満ちている。とりわけ、彼が明治三十四年（一九〇一）に提唱した「美的生活」論は、「本能」の充足に絶対的な価値を認め、「日本主義」から「個人主義」への高山の思想的転換を示すものとして位置づけられているが、その評価をめぐっては、「道徳」を軽視する主張として、発表当時から今日に至るまで批判されてきた。また、「美的生活」の是非をめぐる論争がニーチェ解釈を争点としたこともあって、高山自身におけるニーチェ理解が問われたこともあった。近年、高山樗牛についての研究が進み、彼が専門とした「美学」の内容を重視する立場からの「美的生活」論再解釈も進められている。しかし、二十世紀初頭の日本社会のなかで、高山の議論が持ちえた意味について、時代状況をふまえた上での具体的な検討は、いまなお残された課題であるように思われる。

高山は、「美的生活」論の発表後、ニーチェをはじめ、平清盛、日蓮など、「偉大な人格」の持ち主の事績を讃えていくようになる。「美的生活」論で定式化された「本能」の充足と「天才」の賛美とは、いかなる論理で結びつけられていたのだろうか。本報告では、従来議論をふまえ、高山が唱えた「美的生活」論と、それ以後の日蓮論などを規定していた彼の思考方法の特異性に注目することによって、これまでと違った角度から高山の「美的生活」論を検討してみたい。以上を通じて、日清・日露戦間期において、高山樗牛の思想活動が果たした意義を考察していくことが、本報告の課題である。

西田彰一（総合研究大学院大学大学院生）

「笈克彦の思想と「日本体操」」

【要旨】

近代天皇制と身体技法に関する従来の研究では、天皇の政治的身体を演出することで、支配の正当性がどのように構築されるかについて分析がなされた。かかる研究では、国民統合や天皇崇拜、さらには外交において儀礼や行列が大きな役割を果たしたことが明らかにされた。

ところで、こうした近代天皇制と身体技法の関係は、天皇の権威がどのように示されるかについて研究されてきたため、権威的で威厳のある天皇とその力に服する国民という構図を描いてきたといえる。だが、その一方には身体的技法を通して、国民と天皇の関係を宗教的な一心同体の明るい共同体として描いた者たちも多数いた。法学者でありながら神道思想を説いた笈克彦（1872 - 1961）や、その影響を受けた農業指導者や政治家・官僚たちはその好例である。

そこで、本報告では笈の思想と身体技法がどのように結びつくのかについて検討する。従来研究では、笈克彦は独自の神道思想である「神ながらのみち」を説いた特異な思想

家として扱われてきた。その一方で、その実践運動についてはあまり注目されてこなかった。だが、笈は「神ながらのみち」が身体的実践と不可分であることを説いている。

笈が説いた思想と実践の有機的な関係性を分析するために、本報告では特に「日本体操」（やまとばたらき）に注目する。「日本体操」とは、笈が「神ながらのみち」を普及するために考案した体操である。これまで「日本体操」は集団体操のひとつとして扱われてきた。しかし、「日本体操」は神道の儀式の様式や神話の物語などをその動作に取りこんでおり、単なる集団体操の範疇におさまらない。さらに、この「日本体操」は満蒙開拓青少年義勇軍や農業訓練所において、日本国内だけでなく、満州や朝鮮半島などの海外植民地においても実践されている。これらの問題について考察することで、近代天皇制国家と身体技法の関係について、新しい視座から検討を試みる。

新田佳恵子（皇學館大学大学院生）

『皇太神宮儀式帳』における神観念

【要旨】

『皇太神宮儀式帳』は、延暦二十三年（八〇四）に、皇太神宮の禰宜・宇治大内人の連名で神祇官へ提出した解文である。その中には、神宮の祭祀が詳細に記載されている。津田博幸氏は、「罪を申す・考」の中で、禰宜と大内人が自分達の奉仕氏族としての正当性を証明するべく起源神話を巻頭に据えたということを言われている。しかし、ただそれだけの為に神話を掲載するのであれば、物忌による榊の取り扱いや榊の区別などは何も必要ないはずである。そこには、神宮祭祀の祖型があり、現代の神観念とは違う、神観念が存在している。

近代では祭祀とは全く関係のない日にも榊の奉飾が行われる。しかし、古代においては、「重大な祭儀にのみ新しい榊を差し立てることにより祭祀空間の聖性の標示とした。」と阪本廣太郎氏も言われるように、榊を奉飾することが祭りの空間を構成する一要素となっていた。『皇太神宮儀式帳』の太玉串行事は、神話の再現であり、宮飾りの榊、太玉串、天八重榊などから、樹木を使用して世俗から空間と時間を区切って祭祀を行ったことがわかる。そして、神話を再現することで、神の再生、復活を意図したと考えられる。それは、真弓常忠氏も言われているように、葵祭の御阿礼神事と似ている。これらのことから、祭祀における樹木使用が単なる樹木祭祀ではなく、神の顕現という観念が第一にあることが考えられる。つまり、本殿に鎮座する神を祭るのではなく、また、現代の玉串奉奠のように何かを叶えてもらうために供えるのではなく、ただ、神の顕現に焦点が当てられている。

また、日本民族という視野から、農耕儀礼や太陽信仰と神宮祭祀を結びつける考えや、「崇り」という観念が『皇太神宮儀式帳』の中にあるのかも考察する。

林淳（愛知学院大学）

「失われた暦法を求めて——渋川春海から篤胤へ——」

【要旨】

『日本書紀』では神武天皇東征のところから、年次、月次の朔日、日次の干支が付けられている。そして神武天皇が橿原宮で即位し、「是歳を天皇の元年とす」と記されている。干支が付けられている以上、何らかの暦法が適用されたと考える方が自然である。他方で『日本書紀』の持統天皇四年十一月十一日に「甲申に、勅を奉りて始めて元嘉暦と儀鳳暦とを行ふ」とある。ここで中国の暦法が、初めて日本に伝来した時のことが記録されている。元嘉暦、儀鳳暦という中国の暦法伝来前に、日本には中国の暦法とは別に独自の古暦法が実在したと想定したのは、貞享改暦を行った渋川春海であった。渋川春海は、天文暦学、計算の能力を備えながら、同時に山崎闇斎のもとで垂加神道を学んだ人であった。渋川春海は、古暦法を想定し、古暦法の計算式にもとづき、神武天皇即位の年から渋川春海の時代までの二千三〇〇余年の全月の朔日の干支を割り出して、月の大小を確定して一覧表を作成した。『日本長暦』がそれである。「闇斎深く此の両事を感嘆して謂く、我が国再たひ開闢すと」述べ、『日本長暦』を激賞した（『春海先生実記』）。

上代に古暦法が実在したという想定は、中根元圭『皇和通暦』に継承され、さらに宣長、篤胤に影響を与えた。中根元圭は、『日本長暦』の不備を補ったが、古暦法のところでは渋川春海をほぼそのままに継承した。宣長、篤胤は、渋川春海、中根元圭とは違って、長暦そのものよりも、原初的な暦に関心をもった。宣長は、上代から古暦法が実在したとする渋川春海、中根元圭の見解を否定し、暦法以前の自然暦である「真暦」を想定した。篤胤は、渋川春海の長暦研究と宣長説を統合しようと試みて、気宇壮大なスケールで「天朝無窮暦」を提唱した。本発表は、渋川春海から篤胤までの古暦法の語りの系譜を明らかにするものである。

平山洋（静岡県立大学）

「石河幹明入社前『時事新報』社説の起草者推定—明治一五年三月から明治一八年三月まで—」

【要旨】

本報告は日本学術振興会平成二五年度科学研究費補助金（研究種目：挑戦的萌芽研究、課題番号：25580020）、課題名「福沢健全期『時事新報』社説起草者判定」（以下本研究）の一部として、明治三一年（一八九八）以降に『時事新報』主筆となる石河幹明が入社するまでに掲載された同紙社説の起草者を推定する試みである。

本研究の全体構想は、福沢諭吉が主宰していた新聞『時事新報』の社説の起草者を新たな方法を用いて判別したうえ、その中から福沢直筆の社説を選び出すことでジャーナリストとしての福沢の全体像を再構成することである。加えて判別の方法論の確立のために、まず福沢の署名著作の本文をデータベース化し、それらを基礎資料としつつ、無署名社説

と語彙・文体の比較を行う。なお、『全集』非収録社説はテキスト化して、署名著作ともどもネット上のサイト「平山洋氏の仕事」で公開するものとする。

本研究の具体的な目的は、明治三一年九月の脳卒中の発作発症までの福沢健全期の全社説の起草者を判定して、現行版『福沢全集』の「時事新報論集」に適切な加除を施すことである。そのうち本報告が扱うのは明治一五年（一八八二）三月二日の創刊から明治一八年（一八八五）三月三十一日までの九三〇号分で、石河はこの期間の社説を担当していないのが明らかであるのみならず、大正版『福沢全集』および昭和版『続福沢全集』に収録する社説を選別するにあたって、石河自身の記憶や記録に依拠していないことが確実な社説群でもある。この期間に掲載された社説をまとめて前石河社説群と呼ぶことにする。

報告者は前石河社説群三三八日分から、一四六日分の福沢語彙（特徴的語彙）使用の社説を選び出し、さらに四二日分の推定福沢直筆社説を発見した。これらは従来まで全く知られていなかった福沢の逸文であると考えられる。

ポロヴニコヴァ・エレナ（東北大学大学院生）

「大雑書に表現される「世界」観——大地に対する認識を中心に——」

【要旨】

庶民の世界観を把握するためには、庶民の作成した資料・庶民によってよく読まれた資料を扱う必要がある。その資料の一つとしては近世の百科事典である節用集を挙げることができる。節用集で表現される「世界」とは、「須弥山之図」に見られる宇宙的な広がりとしての仏教系の「世界」と、卵形の世界図・両半球図に見られる地理的な広がりとしての「世界」である。しかし、仏教系世界観を表す「須弥山之図」が元禄期に刊行された節用集にしか見られない。それ以降、節用集に挿入されるのはマテオ・リッチ系の世界図や（幕末になってから）両半球図である。すると、庶民の「世界」観は元禄期頃をもって仏教系世界観から縁遠くなってきたかのように見える。

また、節用集の世界図を見ると、多くは楕円（卵形図）あるいは円（両半球図）の形で描かれている。このようなことから、大地が丸いという認識が庶民の間で流布したかのように見える。それが以上の仏教系世界図の抜去と相まって、元禄期頃以降は庶民の「世界」観が次第に近代的な世界観へ変わっていったように見える。

しかし、実際はどうであったのか。

節用集と同様に、庶民の作成したもの・庶民によく読まれたものとしては大雑書という書物がある。大雑書には須弥山図があり、地球説・地動説に関する記述もある。そこに表現される「世界」観を解明するのは本発表の目的である。

本発表では、大雑書における記述を資料にして次の二点について検討する。その一は須弥山図で表現される仏教系世界観であり、その二は新しい知識（地球説・地動説）の庶民の間での流布である。

大雑書における庶民の「世界」観とは、仏教系世界観でありながら、幕末に近づいてく

ると、地球説などの新しい知識の流布と相まって転換されたものである。このような「世界」観は古代・中世から受け継がれており、近代にもつながっている。ここには従来の常識から新しい常識への転換が読み取れる。

前田勉（愛知教育大学）

「細井平洲における教育と政治——「公論」と「他人」に注目して——」

細井平洲（享保13～享和1、1728～1801）は、米沢藩主上杉鷹山が創建した興讓館の藩校教育に関与したことで知られている。そのため教育史のなかで、藩主と家臣への教育論、講釈による領民への道徳的教化が注目されてきた。また思想史的には、いわゆる折衷学者として徂徠学以降の思想状況のなかに位置づけられてきた。総じて従来の平洲研究は、折衷学という言葉からも察せられるように、思想的には穏健な、というよりは特別に目立った所のない、18世紀後半の教育家・思想家として捉えられてきたといえるだろう。ところが、平洲には「公論公評」という極めて注目すべき考え方がある。天明7年7月に尾張藩に提出した藩政改革の意見書のなかで、平洲は「御政事は大小共に公論公評にて無御座候得ば、衆心一定不仕候」という立場から、「君臣公会」の席上で、「御政事に預かる」「執政大身より有司小臣」が、「御前」で腹藏なく大声で「利害」を論じ合うべきだと説いていた。本発表では、この公開の場で「御政事」を論じ合い、「衆人一定」の合意を獲得して行くという「公論」の考えに着目することによって、平洲の独自性を明らかにしてみたい。具体的には、平洲の教育・学問論が、水くさい「他人の交り」を前提としていたがゆえに、お互いの「相談」を重視していたことを指摘したうえで（「会読」との関連がある）、藩主と家臣間の「御政事」の「相談」も、その延長だったことを明らかにする。

松川雅信（立命館大学大学院生）

「闇齋学派における『家礼』の受容」

【要旨】

南宋の朱熹（1130～1200）は、『儀礼』等の礼書を敷衍しながら、当該期の士大夫向けに冠婚喪祭礼の手引書『家礼』を著したとされている。この『家礼』は、後に中国はじめ朝鮮・ベトナム・琉球・日本と、東アジアにおける日常レベルでの祭祀・儀礼の領域に大きな影響を与えることとなった。一方、既往の徳川思想史研究の分野にあつて、『家礼』というテキストが徳川日本にもたらした影響に関しては、他の研究対象に比して、十分な検討を経てこなかったという印象を受ける。おそらく、徳川儒教には儒教における祭祀・儀礼の側面が、さほど内包されていなかったとする共通認識のもとで、かような状況を生じたものと思われる。さりながら、徳川日本にあつても『家礼』は、祖先祭祀や葬送儀礼等の日常的な祭祀・儀礼に深く関与するテキストとして、多くの知識人達の議論の対象となっていた。とりわけ、比較的早い段階から『家礼』をめぐる問題に本格的なアプローチを試みていたのは、山崎闇齋（1618～82）の流れを汲むいわゆる闇齋学派の知識人達であつた。

闇齋学派では、崎門三傑の一人浅見綱齋（1652～1711）が校訂本『家礼』の刊行を行い、これに関する講義等を行ったことを一つの端緒に、『家礼』をめぐる様々な議論を生むこととなった。殊にそれは、儒家を中心とする崎門派のみでなく、神道を奉ずる垂加派の知識人をも包括し、かつ学派外にも波紋を投げかけるような祭祀・儀礼に関する広範な議論であった。本発表では、儒教・神道・公家等の世界に大きな影響力を有した闇齋学派を素材として、従来相対的に後景へと退いていた、『家礼』というテキストの徳川日本における受容とその影響の一側面を叙述することを試みる。

山口剛史（皇學館大学）

「森昌胤と『神道通国弁義』」

【要旨】

本発表では、森昌胤の思想の一端を、彼の著作『神道通国弁義』を基に検証したい。

一般には広く知られていないが、森昌胤は神祇伯白川家の学頭で、伯家神道の思想面を考察するに当たって避けては通れない人物である。森左京昌胤（専銓）は、享保元年（正徳六年＝一七一六）に、丹波篠山で生まれたとされる。号は専峯で、一に照彦齋と号し、宗麟とも称した。佐々木源氏で、盛綱の裔という。医業の家で、父吉田正甫は福知山藩医であった。舅家岡村家の嗣子として玄達と称し、享保十九年（一七三四）、医学を修めるために京都へ遊学し、宮城柳安に師事した。元文元年（享保二十一年＝一七三六）、正甫の死で岡村家を辞し本姓に復するも、再び上京して、医業で生計を立てつつ神祇の道を学ぶ。遠祖雨森某が伯家学頭であったとの伝から、雅富王の下で雨森姓を名乗っていたが、雨の字を削って森とし、昌胤と改名した。宝暦十年（一七六〇）、資頼王の信任厚い昌胤は、白井雅胤（玄銓）から伯家学頭職を継承する。江戸で伯家神道を広め、その成果を賞され顕胤の名乗りを許された。その後も江戸を中心に活躍したが、天明五年（一七八五）、甲斐国河口にある、所縁の富士御師宅において七十歳で病没し、同地に埋葬された。霊神号は、有功霊神である。

この昌胤の代表的著作が、『神道通国弁義』である。同書では、吉田神道のみならず、吉川神道・垂加神道も批判の対象とし、儒学すら否定している。ひたすら日本の独自性を主張し、延いては伯家神道の正当性を訴えている。とは言え、本書は成立年すら未詳で、『神道叢説』に収められてはいるものの、これまであまり注目されることがなかった。昌胤については、富士御師研究の立場から近年着目されており、発表者も鎮魂祭研究から少しく取り組みを進めている。そこで、彼の『神道通告弁義』を思想史学の立場から検討することには意義が有ると考える。

山本晋平（同志社大学大学院生）

『太平記秘伝理尽鈔』における倫理観——〈聖人・釈迦「賊」論〉を中心に——

【要旨】

慶長・元和頃に成立したと考えられる『太平記秘伝理尽鈔』は、南北朝時代の歴史を描いた『太平記』の詞章に、「評」（論評）と「伝」（異説）が加わることで、兵法・治国・道徳など多様な主張が説かれた書である。

『理尽鈔』の冒頭には、「三綱五常」の「道」を知る「上代」の人々とは異なり、「邪正」を弁えない当代の人々（特に為政者）に「道」を知らせるために「善悪ヲ評判」して「無道」を止める、と説かれている。これに従えば、『理尽鈔』が目指しているのは当代に「道」を敷衍、浸透させるところにあり、こうした内面的規範としての「道」の理論的基礎をなしているのは、儒学・仏教・神道の教えである。

しかし『理尽鈔』巻第二十四には、「聖人や釈迦は、自らが世を上手く渡るために「五常」や「仏法」を説いた「賊」である」と主張する箇所がある。従来の研究では、この〈聖人・釈迦「賊」論〉によって聖人や釈迦も利己心と功利を免れない存在であると言われ、その教説は渡世の方便であると同時に国家統治のイデオロギー装置であると論じられてきた。

『理尽鈔』が天下国家の統治方法を述べる意図がある以上、「道」が国家統治の機能となることは首肯できるが、その内実が創始者たる聖人や釈迦の渡世の方便にすぎないのであれば、「道」には本来的な道徳的価値が認められていないことになりかねない。また「道」には「五常」や「仏法」に立脚して「利欲」を「無道」と批判する面があるが、こうした内容は聖人・釈迦の功利性を主張する言説とは矛盾する。

このように、『理尽鈔』の倫理観を考える際、「道」を説く存在の聖人・釈迦を「賊」とする〈聖人・釈迦「賊」論〉の位置づけが重要な問題となる。以上の観点から、本発表では、先行研究を整理しつつ、巻第二十四の〈聖人・釈迦「賊」論〉を再検討し、聖人観を中心に分析を行うことで、『理尽鈔』における聖人・釈迦の倫理的価値について明らかにしたい。

山本慎平（大阪市立大学大学院生）

「一高における新渡戸稲造のイギリス流エリート教育の試み——『校友会雑誌』における校風論を手がかりに——」

【要旨】

報告者は拙論「大正期における新渡戸稲造のデモクラシー論」（2012年）において新渡戸の民衆へのデモクラシー普及のための啓蒙活動について論じた。今回の報告では旧制第一高等学校校長時代（1906年—1913年）の新渡戸に焦点を当て、彼のエリート教育の試みとそれを巡って起こった校風論について検討する。一高では初代の木下廣次校長や新渡戸の前任狩野亨吉校長のもとで籠城主義、蛮カラ、勤儉尚武といった校風が確立した。それに対して明治後期から個人主義の校風論が台頭し、籠城主義と対立した。校長に就任した新

渡戸はソシアリティーの重要性を説き、ここに籠城主義、個人主義、ソシアリティーの三つ巴が完成する。一高の校風論と新渡戸の影響については多くの研究が指摘しているが、『校友会雑誌』の内容に踏み込んだ研究は少ない。

新渡戸の校長就任後、『校友会雑誌』には頻繁に校風論が掲載されるようになる。本報告では、『校友会雑誌』に掲載された校風論の中から、新渡戸のソシアリティーがどのように受け止められていたのかを考察する。さらに新渡戸の茶話会等での挨拶や演説稿から新渡戸の理想とした教育観を分析する。

これまで新渡戸は籠城主義を批判しソシアリティーを説いたと指摘されていたが、『校友会雑誌』における新渡戸の発言からはソシアリティーの重要性を説きつつも籠城主義を完全に否定していたのではなく、むしろ自治の精神を育てるために評価していた点が伺える。その場合に新渡戸が例として出したのは、最も自治が発展したイギリス国民であった。新渡戸は一高においてイギリスのパブリックスクールの教育を目指し、学生たちに真の意味での自治を教えようとしたと言える。このような試みは蛮カラ主義やドイツ文化の影響が強かった一高で異色であったといえよう。最後にこのような新渡戸のエリート教育と、新渡戸の大衆教育との異同について触れることで、新渡戸の教育観の全体像に迫りたい。

弓谷葵（大阪大学大学院生）

「〈共同体〉論としての和辻倫理学」

【要旨】

本論は、和辻哲郎（1889-1960）のテキスト『倫理学』の考察を中軸に据えて、和辻の「倫理学」＝「人間学」において表れる「民族」「国家」あるいは「日本」といった枠組みについて、その伸縮可能性を問う試みである。それは必然的に、和辻倫理学が、そのあらゆる制約をみずから超えていく潜在的な過剰を問うこと、「人倫」的紐帯という学問的措置によって自在に自／他の境界線を操作しうる〈共同体〉論として、和辻思想史の意味を解釈することともなると考える。

改訂を経てひとまずは完結の形をとる『倫理学』上中下巻は、周知のように、公的な認可を得た「二人共同体」としての夫婦、血縁共同体、地縁共同体、経済的組織、文化共同体たる民族、そして国家へと「人倫」の精度を高めていく、「共同態」の体系を描き出す。「倫理」という基準に拠ることで自在に「なかま」を認め得る、異文化共生の論理は、しかし同時に、露骨なフォビア（嫌悪）の感情をもひとつの「間柄」として温存させ得るような一面をも、確立させているのではないだろうか。

李月珊（東北大学大学院生）

「近世後期の藩校における「神」の祀り——津藩有造館の積奠をめぐる論争と実践——」

【要旨】

近世日本では儒学教育が隆盛したとともに儒学の聖賢を祀る学礼——積奠も多く行われ

た。その中で藩校の積奠は、古代における積奠や昌平黌の積奠とは違い、また中国・朝鮮の積奠とも違う独特の様相を呈している。特に吉備真備と菅原道真を孔子の従祀にする津藩有造館の積奠は、成立当初から論争の焦点となり、やがて他藩に影響を及ぼしている。

論争の一つは孔子の配享の問題である。当時の督学津阪孝綽は儒学を「他山の石」と認めながら、日本における「文武の道」の淵源を孔子の配享に託していた。一方で、水戸藩の藤田東湖は、吉備の入祀を疑問視するほか、津藩の祀り方を「漢学をひろめたるのみ」とし、これに対して「神国の学校には神皇をあがめ祭」ること、つまり武甕槌神の祀りを第一にすべきと批判した。東湖の批判を受けて嘉永年間有造館内部において更なる議論が繰り広げられた。督学斎藤拙堂は孔子の配享に日本の武神を入れることを強調した。儒員石川之圭は既有制度の維持を重視する一方、武神を祀ること自体は否定しなかった。さらに孔子の称号について、津阪孝綽の時は「大成至聖文宣王」とするが、孔子を「外国小邦の臣」とする水戸藩では木主に「孔子神位」と書いてある。これを意識するものとして津藩では「文宣王」の称号を『延喜式』の伝統と看做す意見や、「広く世界の上より通観する」という立場を取る意見が出ており、水戸藩と津藩における歴史意識と学統学風の違いが色濃く表されていながらも、共通する部分も見て取れる。

要するに、本発表は従来の研究であまり重視されなかった積奠の問題に注目し、津藩有造館の積奠をめぐる論争と実践の分析を通して、近世後期武士教育の現場における「神」意識の変動を捉えようとするものである。積奠に関わる「神儒」・「文武」・「内外」の視座を究明することは、近世後期儒学の運命を理解する鍵の一つになるであろう。

パネルディスカッション

1 パネルセッション「思想史としてのおみくじ」

コーディネーター・司会

大野 出（愛知県立大学）

元三大師信仰をめぐって—その研究の課題—

島田健太郎（学習院大学非常勤講師）

『法華経』と御鬮

芹澤寛隆（東北大学大学院生）

和歌みくじの近代

平野多恵（成蹊大学）

メディアにおける女子教育

小平美香（学習院大学非常勤講師）

コメンテーター

加藤みち子（財団法人東方研究会）

【要旨】

所謂おみくじについて思想史の立場から論ずるに際して、まず元三大師に対する信仰を避けては通れない。日本における、その大半に於いて元三大師への信仰がその裏打ちとなっているからである。まず島田報告において「元三大師」に対する信仰の中世から現在までの多様な広がりについて論ずる。なぜ元三大師信仰が広まったのか等の疑問のもと、元三大師信仰の思想史的側面を考察する上での問題点を整理する。

次ぐ芹澤報告では『法華経御鬮靈感籤』を中心に論ずる。同書にある文言は第一番から第九十六番に至るまで全て『法華経』に拠っている。現在も修法されている同書に関わる事例も紹介し、元三大師御籤とは異なる系統の御鬮について、その特徴や日蓮教学との関係を示すことで、日蓮門下における御鬮の持つ意味合いを確認する。

次ぐ平野報告では、日本独自の和歌みくじに注目し、その変遷をたどった上で、近代以降に増加した和歌みくじについて明らかにする。幕末、神道側から仏教や易占の影響を排除した独自の和歌みくじが意識的に作られた。そして明治の神仏分離により、和歌のおみくじが増加する。さらに明治末期には山口県において雑誌『女子道』刊行のために和歌のおみくじが作られるようになるのである。

最後に平野報告を受ける形で、小平報告では主として雑誌『女子道』について論ずる。同書の刊行活動は、みくじと密接な関係を持ち、神社を拠点としながらも、単に神道教化に留まらず、広く女性一般の教育、啓蒙をめざしており、また「雑誌」というメディアを活用したことは注目に値する。小平報告では『女子道』を近代女性誌の中に位置付けつつ、明治～大正期の女性の教育、啓蒙活動という側面からの考察を行う。